

絲綢之路

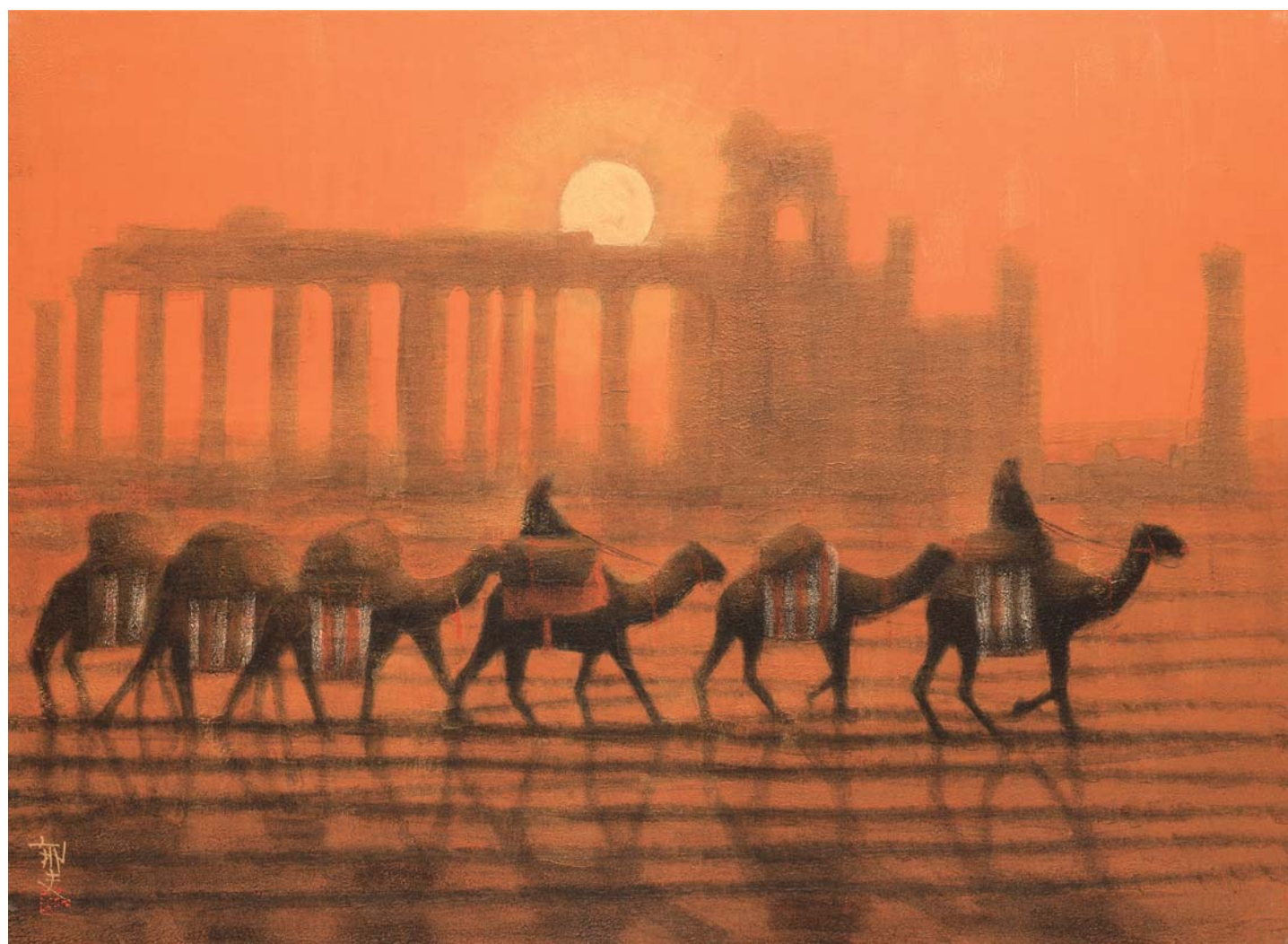
シルクロード

S I L K R O A D

2013-新春

No.71

●表紙の画および題字は、
故・平山郁夫画伯のご厚意により
ご提供いただいているものです。



朝陽 パルミラ遺跡 2007年



【葡萄唐草模様について】

古代、ペルシャ、コーカサス生まれの葡萄が蔓草と一つになり、西へ、東へ、シルクロードを経て東西の文化を彩る文様となりました。私どもの財団ではシルクロードを中心に、世界の文化に寄与できればと、この葡萄唐草文様をシンボルマークにいたしました。

●シンボルマークデザイン：吉田左源二

公益財団法人

文化財保護・芸術研究助成財団

FOUNDATION FOR CULTURAL HERITAGE AND ART RESEARCH



新年明けましておめでとうございます。

去年はアメリカのオバマ大統領再選以外は世界で多くの指導者が変わりました。指導者が変わることは、その国の政治体制が変わることを意味します。政治の世界は誠に諸行無常です。我が国も例外ではありませんでした。庶民が願うのは、健康で平和な日々をおくることが出来るか否かに尽きると思います。果たして今年は日本が、世界が、どういう歴史の流れの中に置かれるのでしょうか。

ところで、私が学長を拝命しております東京藝術大学の美術館で昨年「尊厳の芸術」展という展覧会が開かれました。御覧になった方も多いと思います。また、NHKの「クロージングアップ現代」でも紹介されましたので御存知の方も多いと思います。

話は七〇年近く前に戻ります。太平洋戦争の開戦後、アメリカ西海岸やハワイの一部の地域に住んでいた日系アメリカ人の方が、砂漠などにつくられた強制収容所に三年以上隔離されるという事件がありました。実に理不尽極まりない話です。終戦後、アメリカ大統領は収容された人々に謝罪しますが、十二万人余と伝えられる方たちが不自由な生活を強いられたとのことです。そうした厳しい環境の中でも人間としての尊厳を失わず、限られた素材を用いて美術工芸品を制作すること

で、不安や苦悩を乗り越え、未来へと希望をつないだ方々がおりました。

「尊厳の芸術」展ではそうした作品が紹介されたわけですが、身はアメリカ人であっても、心は日本人といった光が作品一つ一つから放たれている感じがいたしました。まさに芸術とはなにか、という問いに対する一つの答えを得た思いでした。実に学ぶところが大きなものを感じた次第です。

昨年の暮れに嬉しく誇らしい知らせを耳にしました。私の生まれ故郷の佐渡島で新種のカエルの存在が確認されたのです。その名も「サドガエル」です。もともとこのカエルの存在は知られていましたが、遺伝子レベルで新種と判断されたとのこと。佐渡島には皆様御存知のように特別天然記念物のトキがおります。そのため減農薬農法が広がり、その結果、サドガエルも殖え、トキのよい餌にもなっているようです。トキに食べられるサドガエルは災難ですが、生物学者の見解は自然界でこれはバランス的にはよいとのこと。自然をめぐるとの話は微笑ましい部類に入りますが、東日本大震災に関してはそうはゆきません。昨年末の総選挙の中で、最大級の被害を出した陸前高田市の市長である戸羽太さんの嘆きが紹介されていました。戸羽さんが主張する主旨を引用させて頂きます。

各政党は公約の中では震災からの復興を盛

り込んではいるものの、報道やテレビ討論ではほとんど語られていない。違和感を感じる。未曾有の震災、絆、とあれだけ言っていて、もう過去なのか……。

戸羽さんの嘆きは怒りでもあるでしょう。大災害からの復興は忍耐と時間を要します。私たちの東日本大震災による被災文化財の救済支援事業は五年計画の二年目に入ります。しかし、戸羽さんの嘆きからもわかるように時の流れと共に人々の心から大震災の記憶が薄れていくことは否定できません。そうならないよう、私たちも機会あることに被災地の状況を訴えてまいる所存です。そして、その努力を続けます。

本号の中で御報告させていただきましたが、平山郁夫先生の主導で始まりました「日中韓文化交流フォーラム」は、本年度第九回を数え、開催地は日本です。私は昨年、中国で三カ国それぞれの国の言葉で歌える新しい「ふるさとの歌」をつくり、皆さん共に歌いませんか、と提唱してまいりました。この約束を果たすべく頑張ります。御期待ください。

文化を守り維持していくこと、芸術活動を助成すること、こうした活動を継続することは多くの皆様の物心両面にわたる大きな大きな御力が必要です。どうぞ本年も私どもの意をお汲み取りのうえ、よろしく御指導、御鞭撻賜りますようお願い申し上げます。

※2012年12月13日版、朝日新聞より

年頭の御挨拶

心が創りだすもの



理事長
宮田 亮平
(みやた りょうへい)



アテネのアクロポリス

(ギリシャ共和国)



ユネスコ世界遺産(文化遺産)シリーズ

©UNESCO

古代ギリシャを代表する都市国家アテネの中心アクロポリスの丘には、パルテノン神殿をはじめ、エレクトイオン神殿の六体の婦人像など、貴重な遺跡が残されている。紀元前五世紀に建てられたパルテノン神殿は、重厚なドーリア式建築の最高傑作。この神殿の列柱が立つ基壇は幅三十一メートル、奥行き七十メートル。その正面と後ろに八本ずつ、側面に十七本ずつ柱が立っており、各柱の高さは十メートル、下部の直径は二メートルもある。

(一九八七年に文化遺産として登録)

公益社団法人
日本ユネスコ協会連盟

修理のいま

平安時代後期、蔓延する末法思想の世にあって、当時の美術・工芸の粋を結集して建立された平等院鳳凰堂。この世の「極楽浄土」とも称された御堂。世界遺産にも登録された鳳凰堂の平成の大修理のもつ意味を考察する。

修理の裏にあるもの

これを長いと感じるか、短いとするのか。

国宝鳳凰堂の修理は、実質平成二十四年九月の国宝本尊の撥遣（はくせん）（精魂抜き）から始まり、平成二十六年四月には鳳凰堂内部拝観の再開を期している。通常ならこの三倍以上の時間を要する大事業である。

この事業のため、院内の未指定文化財に対して、様々な塗装実験を行うなど十年以上の実験調査を継続し積み重ねてきた。

時間とは、切り取られた現在でしか知覚出来ない。しかし、現在とは過去がアーカイブされ未来に開放された情報でもある。アリストテレスは外側から時間を理解し実体成立を説明するが、仏教では、「いま」苦しんでいるという主体的に時間を捉え、時は流れるということを教理の中心に据える。

時を停めることは出来ないし、常に変化し続ける。そして、いま生きているのである。

平成二十四年に実施された京都南部の観光調

査では、宇治市観光の目的地として約八十五割が平等院と回答され二位以下と五十割の差を持つている。

実際、堂内拝観停止後、拝観者は三十割以下に落ち、修理期間中繁忙期を二シーズン越えることは周辺の観光に関係する隅々まで多大な影響を及ぼすことになる。



本尊・平成大修理。定朝様とは、構造や形態・均衡性だけで読み解くものでないことを、あらためて知った。

修理後の成果を出すことはある意味容易なのかもしれない。

前回の鳳凰堂中堂解体修理（昭和三十一年竣工）から五十六年余りが経過し、瓦屋根、特に両翼廊・尾廊の破損が著しく認められたところからはじまった。その瓦は電気釜が開発された直後の製品で大変もろい。瓦表面では良好に見られるものでも背面には亀裂が走るなど、当時の瓦はほぼ全滅である。

また、木部表面には創建当初酸化鉄系塗装が施されたことがわかってはいるが、前回の修理では部分的で応急的な丹塗り塗装の復旧に留めていたため全体の塗膜剥離が甚だしく、柱等の木部劣化も顕著になってきた。当然、耐震性についても再考察する。

しかし、その陰で泣いているものもある。それが修理であり、しなければ残ることはない。

古の法語の中で…

鳳凰堂の建立は、末法初年という「時機」であった。

鎌倉時代初頭、浄土宗を開いた法然は、弟子遵西の父親・中原師秀に乞われて逆修（自身の死後の仏事を生前に疑似体験する）の説法を行っている。その冒頭、初七日に仏像の新造を契機として仏身論を講じ、ある往生伝に記されている「志法」という沙門の遺書を紹介している。そこでは、

「もし浄土を欣求せんものは、必ず形像を造画すべし。

臨終にその前に現じて、道路を示し心を摂したもう」

と、仏を愛おしみ自身の救済を強く願い、浄土を心から願うものは、仏像や仏画が救済の道しるべになることがうたわれている。

この遺偈に法然は、「この（世）界において造画する所の形像、先達と成りて浄土に送られたもう証拠なり」と、仏の形像自体が往生の証拠だてになるものであることをいい、「同じ仏像を造らんに来迎の像を造るべきなり」としている。

いのちの終焉に忍び寄る不安、苦痛、とらわれや恐れ。それらが仏によって取り除かれていく静かな喜び。仏の相好を心で見ようとするのではなく、造型から仏に近づいてゆくのである。

鳳凰堂の修理が意味するもの

こうした造型を維持する現状維持修理（普通修理法）の基本は調査にはじまる。

国宝天蓋の修理では、一枚の垂板を必ず別の工人が左右それぞれ双方に作りあげそれを接合して一枚としたことがわかり、本尊の耳朶部では、阿弥陀のような動きの少ない像であっても何度も成型し直していること。面部では輪郭だけでなく黒目の墨の入り方や金箔の色などで像の完成度が変化すること。胎内には鳳凰堂外装と同じ塗料弁柄が塗布されていたこと。長押の側面、底面など堂内の位置によって同系色の色材をあえて異なる材料で描いたこともわかつている。

もとより仏は人間の知覚を超えた顕現



平等院 住職
神居文彰
(かみい ぶんしょう)

筆者略歴

一九六二年、愛知県に生まれる。
一九九一年、大正大学大学院博士課程満期退学。
一九九二年、平等院住職就任。
現在、佛教大学等非常勤講師。埼玉工業大学理事、
（財）美術院監事、（財）国立文化財運営機構運営委員、
メンタルケア協会講師など。主な著書に「いのちの看取り」（共著、北辰堂）、「臨終行儀―日本のターミナルケアの原点―」（北辰堂）、「平等院物語」（四季社）、「平等院鳳凰堂 よみがえる平安の色彩美」（東方出版）、「よみがえりゆく平等院新資料で再現する平安美」（学研ビジュアル文庫）ほか。



日本の交響楽一〇〇年

未来へ紡ぐ

再現芸術である音楽は、優れた作曲家と優れた演奏家が組むことで初めてその真価がわかります。音楽の中でも管楽器と弦楽器が一体となった管弦楽。その壮大な音の響きは聞く人を魅了してやみません。日本の交響楽を築いた山田耕柞の跡を継ぐ者たちの活躍をみる。



日本の交響楽の父

「オーケストラ・プロジェクト二〇二二」日本の交響楽一〇〇年「未来へ紡ぐ」は、昨年十月十六日に東京オペラシティコンサートホールで開催され、盛況のうちに終了しました。「オーケストラ・プロジェクト」は、オーケストラ作品の創作と発表のための運動を展開するという共通の目的意識をもって集まった作曲家グループで、一九七九年に第一回公演を開催して以来、これまでに二十六回の公演を開催、延べ一〇四曲もの新作管弦楽曲を初演してきました。私は一九九八年の初参加以来、機会があるごとに出品し今回で五度目の参加となります。

二十七回目の公演となる今回は、特に「日本の交響楽一〇〇年「未来へ紡ぐ」というテーマを掲げました。このテーマは、二〇一二年が日本人による初めてのオーケストラ曲である、山田耕柞の

「かちどきと平和」が初演された一九一二年からちょうど一〇〇年にあたることから、この演奏会を、現代に生きる我々が、未来に向けた新たなオーケストラ作曲の歴史を紡いで行くにあたつての里標としたいという思いから付けたものです。山田耕柞は「赤とんぼ」や「この道」などの歌曲で大変有名な作曲家ですが、日本人で初めて管弦楽曲を作曲し、それがちょうど一〇〇年前であると知っている人は少ないことと思います。そこで、プログラム冒頭の「ごあいさつ」で今回のテーマの趣旨を説明するとともに、演奏前にプレトークを行い、山田耕柞の功績を説明し「かちどきと平和」の演奏録音を冒頭の三分ほど聴いて頂きました。その後、山田耕柞以降の日本の交響楽の発展の歴史を簡単に説明し、そして「かちどきと平和」から一〇〇年後に生きる我々の、今回の新作に対する思いや意図を作曲者本人に語ってもらいました。

このような演奏会では、ただ演奏して終わりということがほとんどですが、今回はプレトークか



音楽を通した文化の発展のために

ちなみに私の出品作は「管弦楽のための協奏曲」というタイトルの作品です。「管弦楽のための協奏曲」というタイトルではバルトーク（ハンガリーの作曲家。一八八二―一九四五）の作品が有名ですが、通常、協奏曲と言えば独奏楽器とオーケス



演奏終了後、舞台上で挨拶する筆者。

トラというスタイルが一般的なので、独奏楽器を含まないのに協奏曲という名が付くこのタイトルは、考えてみると妙な曲名といえます。しかしなぜか私はこの曲名が昔から気になっており、いつかこのタイトルの曲を書いてみたいとずっと思っていました。そして今回、作品のコンセプトを、オーケストラで何かを表現するということより、オーケストラの機能そのものを活用することに焦点をあてた曲を作曲しようと決めた時、その意図を表現するのにふさわしいと考えこの曲名にすることに決めました。作曲にあたっては多くの演奏者の集合体（協奏体）であり、実に多様な音色表現、幅広い音楽表現を可能とするこの媒体の性能を十分に活用したいと願いました。その結果、中間部に奇妙な音色のフーガ、後半に突如現れる伝統的な弦のユニゾンの部分などを含んだ、多楽章的な要素を一つの楽章に凝縮したような曲となりました。演奏技術的にも今回の曲の中では一番難易度が高かったようで、指揮者もオーケストラも苦労されていました。さすがにプロだけあって、本番は緊張感のある素晴らしい演奏でした。ともかく演奏法的に一〇〇年前には考えられなかった特殊な奏法が多用されており、それをもって一〇〇年間の進歩といえるのかは解らないのですが、山田耕柞がもし生きていて今回の曲を聴いたならばどう感じたのかなどと、ふと考えてしまいました。全体としてみると、招待者が多いとはいえないもののホール定員の半分を超えた動員となったため盛況な印象で、また聴衆の反応も大変良く、演奏会としては成功であったと思われまし。

オーケストラの自主公演は多額の経費を必要とし、その経費は出品作曲家の分割負担となるため、個人に大きな出費がのしかかります。そこで、今回（公財）文化財保護・芸術研究助成財団より助



東京学芸大学教授
山内雅弘
(やまうち まさひろ)

ら多くの聴衆が熱心に耳を傾けてくれ、プレトークを通して日本の管弦楽史や我々の作曲家の思いを知ってもらおうという試みは成功であったと思います。



記念コンサート

今回の出品作曲家は、私の他は森垣桂一、木下牧子、堀越隆一といった顔ぶれで、皆、東京芸術大学作曲科を卒業し、すでに多方面で活躍し実績をあげておられる方々です。演奏は大井剛史指揮の東京交響楽団ですが、熱のこもったとても良い演奏をして頂きました。また、木下作品は「ピアノコンチェルト」でしたが、ピアニストの永野光太郎氏は若いながらも堂々とした演奏で聴衆を魅了しました。作品はそれぞれ個性的でスタイルが異なっていました。演奏会のプログラムとして見ると変化に富む結果となり、聴衆にとっても楽しめたのではないかと思います。



ピアノ独奏の永野光太郎氏。

成を頂けたことは大変助けになりました。改めてここに感謝申し上げます。このような自主公演を続けていくことは、文化の発展のためには大いに意義があることと思いますので、これからも積極的に取り組んで行きたいと考えています。

筆者略歴

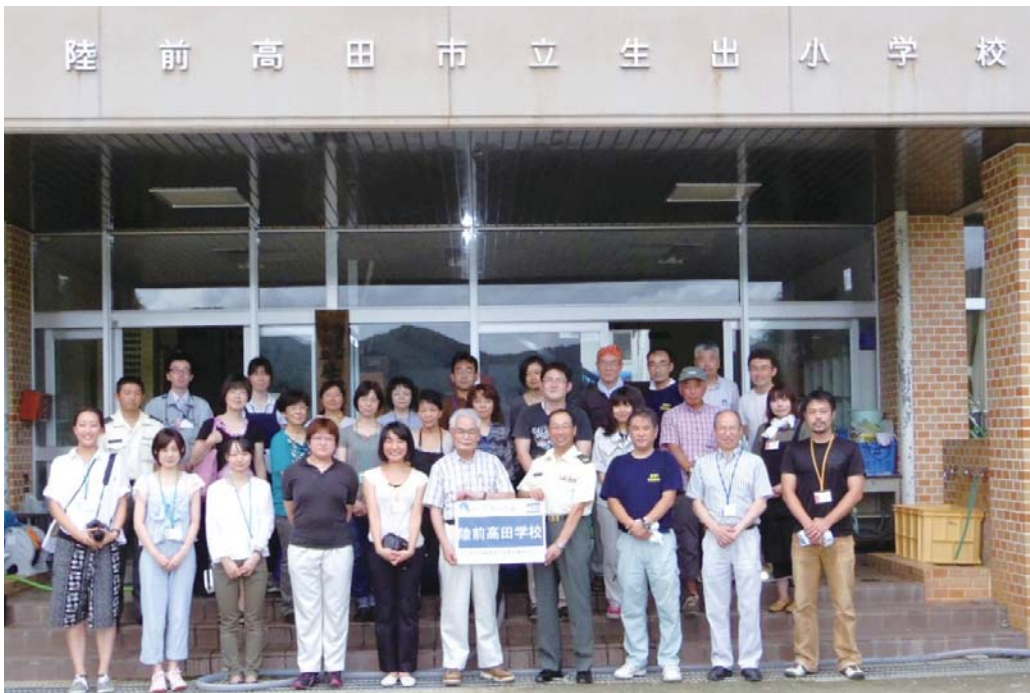
一九八四年、東京芸術大学大学院音楽研究科作曲専攻修了。作曲を本間雅夫、北村昭、黛敏郎、松村禎三、南弘明、八村義夫氏らに師事。第二十一回芥川作曲賞、朝日作曲賞、文化庁舞台芸術創作奨励賞などを受賞。東京芸術大学非常勤講師などを経て、現在、東京学芸大学教授。

※楽曲形式の一つ。通走曲。

※※同じ高さの音。また、そのような音や旋律を複数の声や楽器で奏すること。オクターブにわたる音も含める。

「陸前高田学校」を開催して

自然災害大国日本。地震、津波、台風、火山噴火、集中豪雨……。日本列島は毎年どこかでこれら自然災害にみまわれ、被害を被っています。貴重な文化財も例外ではありません。この課題に取り組む人々の一例をここに紹介。



現・陸前高田市立博物館(旧生出小学校)の前で集合写真。

なぜ陸前高田なのか

このたび（公財）文化財保護・芸術研究助成財団の助成を受け、平成二十四年七月三十日(月)から八月六日(月)まで陸前高田市立博物館と岩手県立博物館において「文化財の危機管理セミナー『陸前高田学校』」を開催いたしました。当機構では、平成二十年度から助成を頂いて、「文化財保存修復専門家養成実践セミナー」を、東京国立博物館との共催で開催しています。このセミナーは、真剣に文化財保存修復専門家を目指す人であれば年齢や経歴を問わず応募することが出来ます。基礎編となるレベルⅠを二カ年修了後、実践編のレベルⅡに進む構成です。レベルⅠは主に座学となりますが、レベルⅡは現場で実際の文化財に触れながら実習と研修を行っています。

レベルⅡを開始した翌年の平成二十三年三月十一日、東日本大震災が発生しました。国の救援委員会(正式名称:東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会)が立ち上がり、当機構も要請を受け、六月頃から陸前高田市立博物館の被災文化財救援活動に参画して



NPO法人
文化財保存支援機構・事務局長
八木三香
(やぎ みき)

まいりました。この活動を主導していたのが、救援委員会のメンバーでもあり、セミナーの共催者である東京国立博物館の保存修復課長、神庭信幸先生でした。こうした経緯を背景に、神庭課長の発案により、平成二十四年度のレベルⅡを「陸前高田学校」と称し、主に陸前高田市立博物館において行わせて頂くことになったのです。

沿岸部に立地していた同館が壊滅的被害を受けたことは、既に様々なメディアにより伝えられている通りです。自然史資料、民俗資料、染織品、紙資料など、地域の歴史と文化を体現する貴重な所蔵品はその殆どが流出、あるいは土砂に埋もれましたが、自衛隊などの協力により、当時ちょうど閉校となっていた山間部の旧生出小学校に収集保管されました。現在は正式にこの小学校だった建物が陸前高田市立博物館として発足し、被災資料は同館職員の手により必死の救命処置が続けられています。

実践という研修から得たもの

この地でセミナーを開くのは、主にふたつの目的がありました。ひとつには、日本全国の文化財専門家をめざす人材が被災地に身を置くことにより、観念ではなく事実としての被災文化財の現状を学ぶというところ、そしてもうひとつは、孤立しがちな被災地の現場に、外部からより多くの情報をもたらし、全国の専門家と双方向のつながりを創出することでした。そこで今回は従来のセミナー受講生に加え、

特別枠として被災区域の文化財従事者を無償で受け入れました。受講者数は、全国から七名、被災区域から六名、そして陸前高田市立博物館の職員十三名が講師となった受講生側に回ったという構成でした。

初日は陸前高田市役所で開校式を行った後、被災現場を訪れ、献花を行いました。日程前半二日間は主に座学、後半はワークショップ形式で、博物館職員の指導の下、貝類標本の整理、木製品の洗浄、紙資料の安定化処置などを行いました。また特別講義として、文化財救援に協力して下さった自衛隊の隊長、写真や画像など個人資料の救援に力を尽くされた地元の修復士にご講義を頂きました。

最終日は岩手県立博物館に会場を移し、最新設備による被災資料の応急処置や、ボランティア活用による救援活動の様子などを伺いました。ひとつひとつの講義内容を詳述する紙面はありませんが、市立博物館職員の方が「自分たちだけで試行錯誤しながら方法を探ってきたが、専門家の話を聞いて自信が持てた。」と話して下さったことや、被災区域からの受講生が「同じ立場の市博職員の姿を見て尊敬の念を覚えた。地元に戻って自分も子供たちのために精進します。」などとアンケートに回答してくれたことは、セミナーの成果の一端を示すものであり、準備の苦労が報われた思いでした。また、一週間寝食を共にする中で、受講生同士の信頼関係が培われ、小さいながらネットワークが構築されつつあるなど、将来的な広がりも期待できそうです。

文化財を守る意味を改めて考える

個人的には、被災現場で目にした、塩を含んでひび割れた地面、上昇した海面の痕が残る市庁舎、特別講義のパワーポイントで映し出された震災直後の映像が頭から離れません。市立博物館職員の皆様は、我々の想像が及ばぬ体験をし、仮設住宅から通いな

がら今日も被災資料の処置に取り組んでいます。何が彼らをそうさせるのでしょうか？ 主任学芸員の熊谷賢先生は、海に背面して建っていた博物館の建物が、津波を背中で受け止めて自分たちを父親のようには守ってくれた、と感じたそうです。私たちは文化財を守っていると思っていますが、実は文化財に宿る先人の力が、逆に我々を支えてくれているのではないのでしょうか？

今回は総勢十六名の講師の方々が、誠意を尽くして講義に当たって下さいました。しかし何と云っても、陸前高田市立博物館職員ひとりひとりの姿が一番の教師であったことに間違いはありません。

今回のセミナーは、大勢の方々のご支援ご協力の下、無事に終了することができました。まずお忙しい中、我々を受け入れて下さった陸前高田市立博物館様、岩手県立博物館様、そして共催の陸前高田市教育委員会様、主催者同様の尽力を賜った東京国立博物館保存修復課様、お忙しい中遠路お越し下さった講師各位、後援団体各位、宿泊に特別の便宜を計って下さった一ノ関プラザホテル様、ボランティア格で毎日送迎をして下さった一ノ関グリーン交通様に、この場を



未だ津波の爪痕が残る元・陸前高田市立博物館内。



貝類標本の安定化処置を市立博物館職員に学ぶ受講生たち。

筆者略歴

一九八一年青山学院大学文学部日本文学科卒。同大学文学部教育学科美術研究室助手を経て九四年に(株)岡墨光堂入社。二〇〇一年より特定非営利活動法人(NPO)文化財保存支援機構設立に参画、現在に至る。

お借りして厚く御礼申し上げます。
そして最後になりましたが、この貴重な機会を実現に導いて下さった(公財)文化財保護・芸術研究助成財団に、改めて心より御礼申し上げます。



第8回

日中韓文化交流フォーラム報告

厳しい環境下のもとで開催された今回の三カ国によるフォーラムは、未来志向のもと、問題の多い政治情勢とは異なり、全ての案件を話し合いの精神で解決することを確認。そして今後もこのフォーラムを継続することを確認しました。

無錫旅情の地で

第八回の日中韓文化交流フォーラム

は、昨年の十月二十六日から二十九日まで、当初の予定通り中国の古都・江蘇省無錫市で開かれました。

無錫は中国東南部の長江デルタの中心に位置し、北に長江（揚子江）、南に太湖をのぞむ水の町です。

太湖は江蘇省南部と浙江省北部の境界にあり、中国五大湖の中で鄱陽湖、洞庭湖に次ぎ、三番目に大きな淡水湖です。周辺は「魚米の郷」とよばれており、中国有数の豊かな穀倉地帯であり、漁業も盛んな所です。その太湖にあって、景観は無錫周辺が最も美しいというのが定説です。

もともと日本人にとっては、一八六六年に大ヒットした「無錫旅情」の町といった方が短的には通りがよいかも知れません。



無錫市人民政府主催による歓迎宴の模様。

「呉の文化」の発祥の地である無錫市は、隋代に築かれた「大運河」が町を貫く歴史の町でもあります。現在は高速鉄道と高速道路が通る交通要所でもあります。

無錫市の面積は日本の兵庫県ほどで、人口は六三〇万人余、改革开放政策以来、国際大都市上海のすぐ隣りという地の理もあって、工業が発展し、経済的にも繁栄し、中国でも最も活力のある都市の一つです。ここでは日本企業の進出も著しく、また親日的な都市でもあります。

三カ国代表団無錫到着

二〇一二年十月二十六日、羽田から二時間四〇分余りで上海虹橋空港へ、そして車で二時間ほどで無錫到着。

今回のフォーラムの日本代表団は国際交流基金より委員長を務める小倉和夫顧問以下四名、当財団からは宮田亮平理事長以下二名という構成でした。「無錫シエラトンホテル」が、

認識として主張した点を整理して記してみます。

中国

争い事は交渉で解決し、全ての交流を正常化することで、地域の平和と安全のために努力したい。

近い将来、企業の文化活動は文化交流の新しい形態になると思う。その意味でも日韓に学び、早く中国独自の企業文化を創出したい。

韓国

韓中日の三カ国が世界に占める経済力は大きなものがある。それだけに世界平和への影響力も大きいので、問題が生じた場合は速やかな解決を希望する。

企業が青少年の育成、知的障害者への技術援助、社会福祉事業等を支援す



第8回日中韓文化交流フォーラム。本会議場の模様。10月27日、無錫シエラトンホテルにて。



海外からの企業進出が著しい無錫市の新区展示センターにて。ここでは「热烈欢迎」の文字も…。



薛福成旧居。薛福成（せつ・ふくせい 1838～94年）は中国近代の思想家であり、外交官。旧居は清朝末期にあって、皇帝の許可によって造られた大型官僚邸宅の典型で、西洋の建築要素も利用されている。

（写真・村木茂）

によびかけるべきだ。

*

また、宮田理事長より、それぞれの国の言葉で歌える「ふるさと」の歌を創るのは、いかがでしょうか、との提案があり、万場一致で賛成を得ました。本年は日本がホスト国となります。東京藝大の協力のもと、日本で「ふるさと」の歌が御披露できることを願う次第です。

今回は前記のように極めて困難な状況下でのフォーラム開催でしたが、無錫市内視察の際も何事もなく、全ての日程を無事終了しました。継続は力なりです。フォーラムのさらなる発展を祈念したいと思います。

無錫市の皆さま、このたびは大変お世話になりました。また、中韓の関係各位の御努力に敬意を表すと共に感謝申し上げます。ありがとうございました。

財団専務理事
小宮 浩
（こみや ひろし）

漆の美 縄文から未来へ

東京藝術大学美術学部 教授
三田村有純
(みたむら ありすみ)

私たちの祖先は、早くから勝物の天然塗料である漆を巧みに使いこなしていた。それは遺跡からの出土品が雄弁に語っている。実用面でも美学的面でもこれほどの勝物はない。では、今後「漆の美」はどう進化して行くのであろうか。

今回は勝物である天然塗料である漆の素顔を紹介した。今号は、私たち祖先が漆とどう係わりをもってきたかを紹介すると共にその未来にもふれてみたいと思う。

遺跡が語る漆の物語

発掘された漆器を見る筆者。



福井県若狭町の鳥浜貝塚からは、縄文前期約五五〇〇年前の角を造形化した赤色漆塗り櫛が出土した。この櫛は、石器で木を彫り、漆と木の粉を合わせた物で造形をしている。その上に炭と漆を混ぜた黒色を塗り、さらにペンガラ顔料と漆を混ぜた朱漆で、下の黒色を塗りこめて作られている。漆黒に輝く黒髪にこの赤色の櫛を飾った人は男女どちらであつたのだろう。權威の象徴として髪の毛を飾つたのだろうか。人々は神（かみハ髪）に何を祈つたのであろうか。

北海道の石狩低地帯からは、縄文時代後期約三〇〇〇年前のさまざまな朱色の漆遺物がたくさん出土する。カリンバ（アイヌ語で桜の木の皮の意）川の右岸にある標高二十五メートル前後の低い段丘

状にあるため、カリンバ遺跡と呼ばれる。一つの墳墓から出てくる漆の飾装身具は朱色の櫛や朱と黒色のアクセサリーは夥しい。死者の權威を象徴するだけでなく、死者への畏敬の念が理解できる。

ここで驚愕することは色相の違う顔料を持っていたことである。マゼンタ系からオレンジ系まで幅広い。この造形物の作り手と使い手はどんな関係であつたのだろうか。華やかな赤色や漆黒のアクセサリーで身を飾っていた人たちの審美観を感じる。

縄文遺跡からは朱色に彩られた土器がたくさん出てくる。これらを概観し、朱色をどのように使っていたのかを考えると、命あることの象徴、再生の祈りを朱色に託したと理解できる。

太陽は東の空より昇り、そして西の空に沈む。それは、すなわち一日の内に生まれ、消えていくと考えられる。生から死へ、死から再生というサイクルを意味する。光の消え去った暗闇の世界は、人に静寂と休息を与える。また、太陽は一年の間に力溢れる時と、衰える時がある。その四季のリズムが作り出す恵みに感謝しながら暮らしを営んでいた人々がいた。

激しく燃える火は赤く、高温になると朱色から黄色そして白色に近づく。燃え尽きた時は黒く、灰色になる。日本の黒い土は次の命を産み出す象徴でもある。

縄文人は、朱（命の色）で黒（命を産み出す色）

を塗り込める事により、次の時代への命の再生を願つたのではないだろうか。漆に見る朱色と黒色は、太古に生きた人々の細やかな心の動きを、現代に蘇らせてくれるのである。

私たち人類にとっての漆

縄文人が残した夥しい漆芸品を概観すると漆は造形素材、接着材、絵画素材、塗料素材として使われていることが分かる。漆の持つ可能性をすでに十分に使いこなしていたことで、縄文人の高度な技術力と、豊かな感性が感じられる。命の再生を願うための造形に、漆の木は発芽から十五年で漆液が採取可能となる。それゆえ短期間で再生産できる漆を使っているのは、地球環境の保護という観点から考えると、実に興味深い。合成塗料は漆とは違う美の力を持つが、漆はまた自然であるからこそ持つ大きな可能性を秘めている。

世界中の美術館が保管する漆液で作られた漆芸作品は経年変化の中で、緩やかに痛んで来ている。日本を語る文化としてヨーロッパ各国がもてはやした日本の蒔絵は、紫外線に当たって劣化が進み、今、手を加えないといけない状況である。日本人の後輩としての責任を持ち、日本人の感性と技術、素材を用いて修復を待つている作品に積極的に対処して行きたい。

漆は強く、美しい。アジアを中心にした漆芸術は、多くの作家により研究創作され、新しい姿として発表されている。世界中には自然系塗料を用いた芸術がある。また化学合成塗料を使った芸術も世界中で作られている。その中で、自然な漆の秘めている美の力は、人類の文明と共に大きな発展をしていくと信じている。

人の一生の中で再生産（十五年）でできる漆こそ、地球環境の破壊を救い、人類の生き方に多くの示唆を与えるものと思う。

事務局報告

東日本大震災被災文化財復旧支援事業 ～気仙沼の現状～

本誌夏号（六十九号）でご報告しましたとおり、平成二十四年度の東日本大震災被災文化財復旧支援事業による修復助成対象事業が決定され、本格的に支援事業がスタートしました。本事業は五年間継続して実施してゆく予定にしております。当財団では今後の支援の参考とするため、十一月七日（水）に小宮浩専務理事とともに、気仙沼市を訪問しました。

当日は、一ノ関駅で宮城県教育委員会文化財保護課の白崎恵介氏と合流し、同氏の案内で気仙沼市役所を訪問。同市役所で、生涯学習課文化振興主幹の幡野寛治氏、同市風待ち復興検討会の泉田英雄氏（豊橋技術科学大学）及び同菅原千栄氏（建築士）から、五件の建造物について修復の進捗状況等を伺い、現場を視察しました。

五件の建造物の現状

当該建造物が位置している気仙沼市・内湾地区は、街自体の復興計画が未確定なため、元の場所での修復が可能かどうか不明な状態にあります。このため、五件の建造物については、沈下した地盤の嵩上げなど都市計画の方向が決まり、元の位置での本格的な修復に取りかかることができるまでの間、破損が激しい箇所などの応急処置を行い保全している状況です。

なお、本格的な修復工事は、平成二十五年度以降になる予定です。

▼五件の現状等は以下のとおりです。▼



（被災前）



（現状）

◆武山米店店舗（米店）は、1930年に建てられた切妻造銅板葺二階建て。現在、補強工事を行い、シートで覆い養生中



（現状）

◆小野建商店土蔵（魚問屋）は、1946年に建てられた二階建てで、切妻造り棧瓦葺き、外壁は白漆喰となまこ壁、扉は黒漆喰で上部は雲に鶴、戸枠は波に亀の凝ったこて絵の施し。現在は、粗壁塗りをを行い、養生中。



（被災直後）



（現状）

◆男山本店店舗（酒造店舗）は、1931年頃に建てられた木造3階建て。現在、曳き家により元の敷地に戻し、シートで覆い保管・養生中。



（被災前）



（被災直後）



（現状）

◆角星店舗（酒造店舗）は、1930年頃に建てられた木造二階建て土蔵造り。現在、隣接地との接触部分を除去し、曳き家により元の位置に戻し、補強してシートで覆い敷地内で保管・養生中。



（被災前）

◆三事堂ささ木店舗（陶器店店舗）は、大正中期に建てられた木造二階寄棟造、屋根は鉄板葺きのモダンな建物。内湾地区でも奥まった場所のため、外見では被害状況がわかりにくいですが、津波による汚泥水が大量に流入し、住宅内の壁及び土蔵の漆喰壁が崩落。現在、応急処置を施し養生中。



（現状）

津波の恐ろしさは想像を絶して言語に言い表せないものがありますが、今回の訪問で見た光景は、明と暗がはっきりしているものでした。 気仙沼市・内湾地区は、海に面した建物の一階部分あるいは二階部分までが大きく損壊し、少し陸側に入った奥にある建物は、見た目にはほとんど無傷な状態でした。理由を尋ねてみると、海に面した建物は津波と一緒に流されてきた船や車などがぶつかり損壊したが、その奥に位置していた建物は水損はしたものの大きな損壊はなかったようです。ほんのわずか数十メートルの違いで天と地ほどの光景を見せつけられ、恐ろしさを再認識しました。 また、海沿いの道路は嵩上げされて復旧していますが、建物は地盤沈下のため、道路から五十センチ程度下がったままとなっており、大きく段差が生じていますので、全体的に地盤の嵩上げが課題となっています。 いずれにしても、都市計画が早く策定され、復興事業が軌道に乗り、人々の心の拠り所である文化財の修復も順調に進み、一日も早く街が元の元気な姿を取り戻すことを祈るばかりです。 （注）「気仙沼市風待ち復興検討会」所有者、商店街や行政の関係者及び建築専門家などで構成。港から気仙沼駅付近までの街道沿いに点在する約三百五十棟の歴史的建造物を活用して復興に役立てるため、大震災を契機にこれまでの「風待ち研究会」の活動を引き継ぎ平成二十四年五月に発足。五件の被災文化財建造物の修復事業を推進。 （財団事務局長 湯浅芳雄）		お願い ◎東日本大震災被災文化財の救援と復旧のための募金のお願ひ 東日本大震災によって被災した文化財の保全にむけて、募金活動を行っています。いただいた浄財は、被災地域の文化財の救援及び修復・保存のために活用させていただきます。皆様のご協力をよろしくお願い申し上げます。募金のお振込は左記の銀行又は郵便局からお願いいたします。 ＊ 銀行振込（①銀行名②口座番号③名義） ① 三井住友銀行 上野支店 ② 普通 6615496 ③（公財）文化財保護・芸術研究助成財団郵便振替（①振替番号②加入者名） ① 0016015112319 ②（公財）文化財保護・芸術研究助成財団（通信欄に「地震」とお書きください） なお、募金はクレジットカードからも可能です。詳細は当財団のホームページをご覧ください。 ＊ 皆様のご協力によって二年目に入った文化財レスキュー活動は、順調に推移しております。原発事故で手を差し伸べることが出来なかった福島県の被災文化財にも調査、救援の手が入ることになりました。 また、新たに文化庁の要請により、東日本大震災被災文化財建造物復旧支援委員会が設置され、建造物の調査、復旧にかかる文化財ドクター派遣事業にも協力することになりました。東日本大震災被災文化財の復旧支援事業は緒についたばかりであり、長期戦になることが想定されます。時の経過とともに忘れられないよう、息	
受賞 当財団評議員であります堤清二氏が、栄えある文化功労者に選ばれ、十一月三日に発令されましたのでお知らせします。 当財団評議員であります水野敬三郎氏が、秋の叙勲で瑞宝中綬章を受賞されましたのでお知らせします。		展覧会・演奏会等情報 上野周辺で開催中（予定）の展覧会・演奏会等をご紹介します。なお、詳細は各館にお尋ねください。 （展覧会） ●第六十一回東京藝術大学卒業・修了作品展 一月二十六日(土)～三十一日(木)東京都美術館他（無料） ※詳細は、東京藝術大学美術学部（〇五〇・五五二五・二二二二）へ ●都美セレクション グループ公募（無料）「STARDUST」二月十五日(金)～二十一日(木) 東京都美術館 「Ezotic ART 蝦夷的芸術」三月二日(土)～八日(金) 東京都美術館 ●特別展「エル・グレコ展」一月十九日(土)～四月七日(日) 東京都美術館（有料） ●特別展「書聖王羲之」一月二十二日(火)～三月三日(日) 東京国立博物館（有料） ●特別展「飛騨の円空」一月十二日(土)～四月七日(日) 東京国立博物館（有料） ●特別展「グレートジャーニー」三月十六日(土)～六月九日(日) 国立科学博物館（有料） ※詳細は、ハローダイヤル（〇三・五七七・八六〇〇）へ	
（演奏会） ●藝大定期室内楽 第三十九回 第一日 二月二日(土) 第二日 二月三日(日) 各十四時 各千五百円 ●モーニングコンサート 二月七日(木) 十一時（無料）（要整理券 当日十時より音楽学部守衛所前で配布） ●東京藝大チェンバローケストラ第二十回演奏会 二月十日(日) 十五時 千五百円 ●モーニングコンサート 二月二十一日(木) 十一時（無料）（要整理券 当日十時より音楽学部守衛所前で配布） ●西国領君嘉（日本舞踊）博士リサイタル 二月二十二日(金) 十八時（無料） ●牧真弓退任記念演奏会（日本舞踊）三月十六日(土) 十五時（無料）（往復ハガキによる事前申込制） ●稲川榮一退任記念演奏会（Tuba）三月十七日(日) 十五時（無料）（先着順…当日整理券配布予定） ●直野資退任記念演奏会（声楽）三月十九日(火) 十八時三十分（無料）招待制（要申込） ●成田英明退任記念演奏会（音楽文芸）三月二十日(水) 十五時（無料）招待制（要申込） ●長濱賢弘（ピアノ）博士リサイタル 三月二十一日(木) 十九時（無料） ●藝大二十一 第七回奉楽堂企画学内公募演奏会 三月三十日(土) 十五時（無料） ※以上の演奏会会場は、すべて東京藝術大学奉楽堂です。 ※以上の他、学位審査演奏会（修士課程、博士課程）が開催されます。 詳細は、東京藝術大学演奏芸術センター（〇五〇・五五二五・二三〇〇）へ		の長い支援が必要ですので、引き続きご支援、ご協力をお願いいたします。 ◎賛助会員ご入会並びにご寄付のお願い 当財団では、財団の活動趣旨にご賛同いただき、ご支援いただける賛助会員の法人、個人の方々を募集しています。 法人正会員 年額（1口） 50万円 個人正会員 年額（1口） 1万円 維持会員 年額（1口） 10万円 財団案内および賛助会員入会申込書のご請求、その他お問い合わせは財団事務局にご連絡下さい。	
今号の表紙 平山郁夫 朝陽パルミラ遺跡  朝陽 パルミラ遺跡 2007年 シリアの首都ダマスカスから北東へおよそ二百三十キロ。パルミラはシルクロードに咲く大輪の薔薇と称された。このオアシス国家の最後の統治者は、クレオパトラと比肩される美女と伝えられる女王ゼノビアだった。世界帝国であるローマへの反逆ゆえにこの国は二七二年、アウレリアヌス帝によって滅ぼされた。 コリント様式の円柱が連なる大通り、そして壮大なベル神殿。朝の光に輝く遺跡はたとえようのない美しさである。 美貌の女王を偲び、平山画伯は女性から成るキャラバンを描いてみたようだ。この作品はその意味で、新たなシルクロードロマンと言えよう。画伯が好み、愛したパルミラ遺跡は一九八〇年にユネスコ世界遺産に登録された。 現在シリアは内戦状態にある。世界的に貴重なシルクロードの文化遺産に戦火が及ばないよう祈るばかりである。		編集後記 昨年は日中韓の首脳が一斉に変わるという大地殻変動の年でした。いずれにいたしましても平和で安定した国造りに邁進していただきたいと願うばかりです。 東日本大震災による被災文化財の救済支援事業は二年目に入ります。事業はおおむね順調には進んでおりますが、復興計画が頓挫したため助成金の受け入れを一旦返上したいという申し出も何件ありました。 この事業はあくまでも現地の事情を尊重して気長に取り組むのだ、という気持ちも必要だという感じがいたします。復興事業は資金の確保がまず第一ですが、それだけではないという一面を思い知らされた次第です。 本年も私たちスタッフ一同、財団の看板の名に恥じないよう努力いたします。文化、芸術関連に対する環境は年々厳しいものがございます。前年にも増して皆様方のあたたい御理解と御支援を賜れば嬉しく思います。 広報誌「絲綢之路」（シルクロード）二〇一三年 新春号 通巻第七十一号 ★平成二十五年一月二十一日発行 ★編集発行／公益財団法人文化財保護・芸術研究助成財団 事務局◎ 〒1100007 東京都台東区上野公園十二一五〇 電話（〇三）五六八五―二三一一 FAX（〇三）五六八五―五二二五 URL: http://www.bunkazai.or.jp/ E-mail: jimukyoku@bunkazai.or.jp ★印刷 株式会社 東都工芸印刷	
訃報 当財団元評議員でありました樋口廣太郎様（アサヒビール株式会社名誉顧問／元会長・社長）が、平成二十四年九月十六日にご逝去され、十一月十六日にお別れの会が執り行われました。永年に渡り当財団をご支援いただいたことに深く感謝し、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。			